目白大学心理学研究
2006年第2号　65－74

終助詞「よ」と「ね」に関する研究の動向

目白大学大学院心理学研究科　福島　和郎
目白大学人間社会学部　岩﨑　庸男
目白大学人間社会学部　渋谷　昌三

【要　約】
終助詞「よ」と「ね」に関する研究の特徴を研究分野ごとに大別すると、初期の国文法分野を中心とする構文論的アプローチや、最近の発達研究と自閉症研究の分野を中心とする事例に基づくアプローチは、主に「よ」と「ね」の対人関係機能を指摘し、日本語文法、日本語教育、言語心理学の分野を中心とする語用論的アプローチは、主に「よ」と「ね」の内在的意味を指摘し、認知科学分野を中心とする談話管理理論に基づくアプローチは、主に「よ」と「ね」が果たす情報伝達時の手続き的な指示機能を指摘しており、研究分野によって解釈が様々に分かれている。また、研究方法については、大半の研究で研究者の経験や理論に基づいた用例解釈が採用されている。発達研究と自閉症研究および一部の言語心理学分野では統計データを重視した研究方法も採用されているが、こうした研究では分析対象とされる発話文の種類が限定的な用法に留まっている。「よ」と「ね」に関する研究の更なる進展には、学問分野を越えた幅広い視点からの実証的研究が求められよう。

キーワード：終助詞「よ」と「ね」、構文論、語用論、情報伝達機能、対人関係機能

問題と目的

終助詞「よ」と「ね」に関する研究は、国文法、日本語文法、日本語教育、言語心理学、認知科学、発達研究、自閉症研究の各分野に加え、最近では言語社会学や社会的スキル研究の一部でも行われている。各研究分野では研究者の立場の違いを反映して様々なアプローチが試みられており、同じ類の例文について異なる解釈が適用されている。

しかしながら、これらの研究分野を総合的に検討した「よ」と「ね」の展望研究はほとんど行われていない。本研究は、国文法分野、日本語文法と日本語教育の分野、言語心理学の分野、認知科学分野、発達と自閉症研究分野の順に諸研究をレビューし、その特徴と問題点を整理し、「よ」と「ね」に関する研究の今後の方向性について検討することを目的とする。

各分野における研究の概要

1．国文法分野における研究

文末に用いられる「よ」や「ね」は山田（1908）によって「終助詞」と命名され、国文法分野で研究が開始された。後に、橋本（1934）が終助詞を「言ひ切りの文節の終にあるもので、そこで文の意味が終止するものである」と規定し、今日の学校文法もこの規定を採用しているのに対し、山田（1908）は終助詞を「この助詞どもはこれが付属するによりて陳述が完結するものにして之を除き去る時は文の精神を変ずることあるものなり」と規定しており、その機能が「文の意味」の終止よりも「文の精神」と関係するものであることを、終助詞研究端緒の段階から指摘している。

山田（1908）の指摘を、時枝（1951）や佐久間（1952）は対人関係の構成という視点に発展させた。佐久間（1952）は今日の終助詞にあたるものを「言葉の演述機能に対してはほとんど

何らの役目も果さないで、むしろ表情的効果、ならびにもっぱら話相手にアッピールするというビューレルのいう『アペル』（うったえ）の機能を発揮するものです。つまり話し手の話の場にのぞむ（対人的）態度を表明するものに外ならないわけです」と指摘している。

時枝（1951）や佐久間（1952）の考え方はその後、佐治（1957）、渡辺（1968）、鈴木（1976）らの構文論研究に取り入れられた。佐治（1957）は終助詞の選定基準を設定し、渡辺（1968）は終助詞全体の枠組みを整備した。渡辺（1968）は「恐らく言語の世界は我と汝、表現主体と話相手との分化対立を共に始めるのではあるまいか。話相手とのつながりにおいて、表現者は言語主体としての資格を獲得し、ここに言語の領域が誕生するのであろう。そして話相手とのつながりを基盤として対象へのつながりが生じ、対象へのつながりを基盤として対象への判断が発展し、ここから更に高次の段階として、対象の分析と綜合、すなわち叙述（属叙と統叙）の領域が展開する」と論じ、「対象とのつながりが遂に消失する所に、話相手との直接的なつながり、すなわち話相手への呼びかけだけが残された領域があるのだと思われる」として、終助詞「よ」には話し手の「判断とのつながりを存す」性質があり、終助詞「ね」には「話し相手への呼びかけしか存しない」性質があるのだということをそれぞれ指摘した。

この指摘を受けて、鈴木（1976）は終助詞全体を「話し手中心の終助詞（A類）」と「聞き手中心の終助詞（B類）」とに分類した。そして、「よ」が「話し手中心の終助詞」で聞き手への「もちかけ」に用いられ、話し手自身の意向に深く関わって禁止や命令の表現にも下接し、聞き手への配慮を幾分か含みながら話し手の確信に関わる性質をもつことを指摘し、「ね」が「聞き手中心」の終助詞で聞き手への「もちかけ」に用いられ、聞き手の意向に対する配慮を示し、聞き手に同意を求めその意思を尋ねようとする性質をもつことを指摘した。

国文法分野における初期の終助詞研究では、終助詞全般の構文上の機能が検討され、主に終助詞が対人場面における態度表明として機能することが指摘された。

2．日本語文法・日本語教育分野における研究

構文論研究の知見を受けて、80年代半ば以降、日本語文法と日本語教育の分野を中心に、主に語用論的側面から終助詞「よ」と「ね」を検討した研究が数多く発表されるようになった。

大曽（1986）は、日本語教育の立場から「よ」と「ね」の学習の難しさを指摘して、以下の1）と2）に代表される例文を挙げ、「判断の一致」を前提とする文に「ね」が用いられ、「判断の食い違い」を前提とする文に「よ」が用いられることを指摘した。

1）アメリカ人はあまり働きませんね。
2）いや、よく働きますよ。

この指摘は、後に益岡（1991）の日本語文法におけるモダリティ研究に取り入れられた[1)]。益岡（1991）は独自のモダリティ理論に基づき、「よ」と「ね」について、「『ね』は、一致する方向にあるとの判断、すなわち、『一致型の判断』とでも言うべきものを、一方『よ』は、対立する方向にあるとの判断、すなわち、『対立型の判断』とでも言うべきものを、それぞれ表現する」と結論づけた。

この指摘に対し、陳（1987）はシナリオと小説から採集した以下の3）と4）に代表される例文を挙げて、「終助詞は話し手と聞き手のあいだの認識のギャップをうめることにかかわる表現手段である」と規定し、「よ」と「ね」について、「『よ』は話し手がすでに認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して伝える必要があると判断して伝えるときに使われる終助詞である」「『ね』は、聞き手の認識にたよって、または、聞き手の前で、話し手が自分の認識をたしかなものにするときに使われる終助詞である」と結論づけた。

3）お前はね、臭いよ。いびきをかくよ。
4）あの女房は泣きもしなかったそうだね。

陳（1987）は「よ」と「ね」が使用される基本的な場面について具体的な指摘を行っている。これに対して蓮沼（1988）は、特に「ね」に関して陳（1987）の規定では説明できない用

法が存在することを指摘した。蓮沼（1988）は5）の例文を挙げて、「ね」の基本的用法は「発話時において自分が述べようとしていることと、他の何らかのよりどころとなるものとの間に、食い違いがないということを、話し手が話の場に持ち出し、確認する」ことにあると規定した。

5）A：大恐慌は本当に起こるのでしょうか。
　　B：起こると思いますね。

さらに蓮沼（1988）は6）の例文を挙げて、「相手の主張を『拒絶』する態度が『ね』の付加によってむしろ強化される」場合があることも指摘している。

6）A：こんなことも分からないの？
　　B：分からないね。

日本語文法、日本語教育の分野に多く見られる語用論的アプローチは「よ」と「ね」に対立する内在的意味を規定しているが、現実にはこうした立場からは説明の難しい6）の類の例文が存在することや、構文研究が伝統的に「よ」と「ね」の連結（相互承接）として扱ってきた「よね」という表現がこうした立場からは説明困難になるという問題を残している[2]。「よね」という表現に関しては今後更なる研究が必要だろう。

この他、特に日本語文法の分野における語用論的アプローチには、「よ」や「ね」とイントネーションとの関係を検討した橋本（1992）や井上（1993）に代表される研究が挙げられる。こうした研究の最近の傾向として、「よ」や「ね」そのものに統一した解釈を設けず発話されるイントネーションのタイプに応じて異なる複数の解釈を設定していること（杉藤,2001；犬飼,2001等）が指摘できる。

日本語文法、日本語教育の分野に多く見られる「よ」と「ね」に関する語用論的アプローチでは「よ」や「ね」が使用される発話場面に焦点があてられ、研究者自身による用例の解釈に基づいて、主に「よ」や「ね」の内在的意味が検討された。

3．言語心理学分野における研究

陳（1987）や蓮沼（1988）と同時期に言語心理学分野でも「ね」の内在的意味を規定した研究が発表された。「情報のなわ張り理論」に関する一連の研究をまとめた神尾（1990）は益岡（1991）等の文法研究にも影響を与えている。

神尾（1990）は「ＩはＸにとって関わりがある、またはない」「ＩはＸがＸのものとみなし得る、あるいはみなし得ない」という関係について、「話し手または聞き手と文の表す情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は〈近〉および〈遠〉の２つの目盛りによって測定される」という仮定のもと、Ｘを話し手または聞き手とするＸの「情報のなわ張り」について「Ｘに〈近〉である情報はＸの〈情報のなわ張り〉に属することが出来、Ｘに〈遠〉である情報はＸの〈情報のなわ張り〉に属することが出来ない」と規定し、さらに「主述の言い切り、もしくはそれに文体的助動詞『です・ます・ございます』などが付加された形」を「直接形」と呼び、「推測、伝聞、主観的判断などを表わす要素を文末に持つ」形を「間接形」と呼び、話し手・聞き手の「情報のなわ張り」と、直接形・間接形表現との関係を、Table 1．のようにまとめた[3]。

Table 1．神尾(1990)による「なわ張り」概念

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接「ね」形	C 間接「ね」形

この表において神尾（1990）は、「情報が話し手のなわ張りに属するばかりでなく、聞き手のなわ張りにも属する」場合のＢの文型を「直接ね形」と呼び、以下のB-1とB-2に代表される例文を挙げて、Ｂの文型が「ある情報が同時に話し手にとっても聞き手にとっても〈近〉」である場合の文型で、「『ね』もしくはその変異形を必ず必要とする」と指摘し、「情報が聞き手のなわ張りに属し、話し手のなわ張りには属

さない」場合のCの文型を「間接ね形」と呼び、以下のC-1とC-2に代表される例文を挙げて、Cの文型が間接形に「ね」を加えた形をとると指摘した。神尾（1990）はこうした特徴から、B，Cの文型で機能する「ね」を「現在の発話内容に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す必須の標識である」と規定した。

B-1　いい天気ですねえ。
B-2　君はドイツ語がずいぶんうまいね。
C-1　君は退屈そうだね。
C-2　お姉さん、結婚したそうだね。

さらに神尾（1990）は、こうした必須要素としての「ね」の機能に加えて、以下のA-1とD-1に代表される例文を挙げ、A,Dの文型で任意要素として「ね」が機能することを指摘し、A,Dの文型で機能する「ね」を「話し手の聞き手に対する〈協応的態度〉を表す標識である」と規定した。

A-1 X：これ、おいくらですか？
　　Y：600円ですね。
D-1 X：吉田君、退院らしいね。
　　Y：うん、そうらしいね。

神尾（1990）の「ね」に関する規定は、陳（1987）の規定があてはまりやすいBとCに代表される例文に対してのものと、陳（1987）の規定があてはまりにくいAとDに代表される例文に対してのものと、2種類に分けて設定している点が特徴的である。

こうした神尾（1990）の研究を「情報の近接可能性および占有度（accessibility and/or possessorship）」という観点に発展させ、Maynard（1993）は、情報が話し手により近い、あるいは話し手に占有されている状況で「よ」が使われ、情報が聞き手により近い、あるいは聞き手に占有されている状況、および情報が話し手と聞き手の両方に近い、あるいは両方に占有されている状況で「ね」が使われると規定した。Maynard（1993）は、神尾（1990）の理論を発展させながら、陳（1987）とほぼ同内容の規定を行っている。

また、岡本（1993）は話し手と聞き手の「関与の度合い」という観点から神尾（1990）に修正を加えた。岡本（1993）は参加者に話題を記述したシナリオを提示し、その場で使用するであろう表現を1個だけ記述させる実験を行い、話し手の関与の高い条件よりも聞き手の関与の高い条件で「間接形」と「ね」が多用されることを確かめた。また、参加者に状況を記述したシナリオを提示し、示された間接形と直接形を比較して話し手の立場としてどちらがより自然と感じられるか評定を求める実験を行い、重大な話題では直接形の使用のほうがより自然と感じられることを確かめた。岡本（1993）は、こうした実験結果から、話し手が情報を専有している場合には「話し手の関与度が聞き手に対して高くなるほど」直接形が用いられやすくなり、「話し手の関与度が低くなるほど」間接形が用いられやすくなると結論づけ、また、話し手が聞き手と情報を同等に共有している場合には「話し手の関与度が聞き手に比して高いほど」直接形が用いられやすくなり、話し手の「関与度が低いときは」間接形が用いられ、同時に「ね」が付加されやすくなると結論づけた。岡本（1993）は、研究者自身の用例解釈に依拠した従来の研究方法とは異なり、参加者の一般的傾向を測定し実証的に規定を行った点が特徴的である。

後に岡本（1996）は「ことばの社会的スキル」という観点から神尾（1990）と岡本（1993）を引用し、特に「間接ね形」の対人配慮上の重要性を指摘した。

言語心理学の分野では「情報のなわ張り理論」以外にもMaynard（1993）をはじめとする理論的研究が存在し、主としてシナリオやインタビューの中での「よ」や「ね」の使用傾向が分析されている。こうした研究の多くは、話し手と聞き手の情報量に焦点をあて、「よ」と「ね」の内在的意味を規定している。

4．認知科学分野における研究

90年代に入り、「よ」と「ね」が使われる例文全般の理解に有効なアプローチが認知科学の分野で発表された。「よ」と「ね」の情報伝達

機能とその後の処理に関するプロセスに焦点をあてた「談話管理理論」に基づくアプローチである。

「談話管理理論」は「対話による情報交換により、知識がふえていったり、信念が変化したり、態度や行動が影響を受けたりといった、言語コミュニケーションの実態を動的に捉える理論を構成し、それに基づいて談話構造における各言語間の差異を原理的に説明することを目標」とした理論で、田窪（1992）によって提唱された。この理論では「談話処理のシステムとして局所的な心的領域」が仮定されており、この心的領域は「長期記憶やエピソード記憶内容に書き込まれている要素、あるいは、対話の最中に実際に体験した内容が書き込まれる」直接経験領域と、「言語的に獲得された知識・情報が書き込まれる」間接経験領域とに分割され、「新規情報の交換は間接経験領域を通じてのみ」行われると仮定されている。そして、このような心的領域に分割された階層データベースの検索や登録、演算に関する指令として「よ」や「ね」が機能することが論じられている。

こうした理論に基づき、田窪（1992）は以下の7）と8）に代表される例文を挙げて「よ」と「ね」をそれぞれ、「『よ』は、基本的には『情報を間接知識領域に記載せよ』という指示である。さらに『これをいま関与的な知識状態に付け加えたのち、適当な推論を行え』という指示も関与性の原則からでてくる」「『ね』をつけるということは、ある情報を別のところで検索、その2つの情報のマッチングをしたということを示すのである。さらに言えば、『ね』はこのマッチングを基にした知識・情報の書き込み確認を示していると考えられる」と規定した。

7）甲：そっちはどうですか。
　　乙：雨です<u>よ</u>。（困ったものです。）
8）君の奥さんはアメリカ人だそうです<u>ね</u>。

金水（1993）は、やはり「談話管理理論」に基づき「よ」や「ね」を「知識への操作指令として規定する意味論」に相当する「手続き的意味論」の見地から検討し、「よ」が「当該の発話を関与的なものとして登録せよ」という手続き的意味をもち、「ね」が「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ」という手続き的意味をもつと、それぞれ規定した。金水（1993）は「ね」に関して以下の9）と10）の例文を挙げて、性質の違う2種類の「ね」に自らが規定した解釈が適用されることを指摘している。

9）A：田中さんです<u>ね</u>。
　　B：そうです。
10）A：いま何時ですか。
　　B：ええと、7時です<u>ね</u>。

認知科学の分野における談話管理理論に基づくアプローチでは談話時の情報伝達機能に焦点があてられ、「よ」や「ね」の「指示」あるいは「操作指令」に関するプロセスが検討された。この結果、神尾（1990）が2種類の規定をした9）と10）の類の例文にも統一的な解釈を適用することが可能となり、また、陳（1987）や益岡（1991）の規定でうまく説明のできない、蓮沼（1988）が指摘する6）の類の例文に対しても解釈の適用が可能となった。この分野では「よ」と「ね」に関する研究が今日も続けられており、こうした研究は今日の日本語文法分野の研究にも影響を与えている[4]。しかしその一方、これらの研究アプローチもまた、研究者自身の用例解釈に依拠しているという問題点が指摘できる。また、田窪（1992）や金水（1993）が「よ」や「ね」を聞き手への「指示」や「操作指令」という「手続き的意味」の観点で捉えている点について、最近の発達や自閉症の研究者たちが、データに基づきこれと異なる見解を示している。

5．発達研究と自閉症研究の分野における研究

発達研究の分野では、永野（1959）に代表される研究が、健常児の場合は「よ」や「ね」が1歳半ばから2歳頃までに現れるようになることを報告している。

横山（1992）は、2歳0ヶ月までに幼児の発した終助詞が「よ」「か」「もん」「ね」「や」「て」「の」「と（「の」の意味で使われる方言）」

の8種類で、このうち「よ」が全体の46.36％、「ね」が全体の14.04％を占めることを報告した。また、「ね」に関しては、①誤用が全く現れていないこと、②最初は大人による先行発話の「ね」を反復・模倣する形で用いられるが、まもなく先行発話がなくても「ね」を用いるようになること、③「ね」を伴う発話の機能は最初は特定のものに限られているが、年齢と共に多様化してくること、さらに「ね」がよく付属する発話は「他の対象や自己の動的状態を表現している発話」「勧誘の発話」「他の対象や自己の、外的あるいは内的な感覚的、知覚的状態を表現している発話」であること、④「ね」を伴う発話の構造も最初は極めて限られるが、年齢とともに多様化してくること、以上4つの特徴を指摘した。

また、古田（2000）は、上昇調または下降調の音調のみをとる「よ」や「ね」に関して、これらが上昇下降調という複雑な音調をとる「よ」や「ね」や、「って」「かな」といった他の文末表現よりも、かなり早い時期に習得されることを報告した。

以上のような発達研究分野の知見は、「よ」や「ね」が情報の登録や検索に関する標識であるとする田窪（1992）や金水（1993）の指摘に対して、そうした標識機能の実行が2歳未満の幼児に可能であるのかという疑問を研究者達に提示している。

この他、発達研究の分野では、Kajikawa, Amano & Kondo（2004）が、幼児の母親の発話に着目し、幼児が「ね」を使わないときよりも使ったときに母親が頻繁に会話を重ねること（speech overlap）を確かめ、「ね」は、聞き手から受容や共感を求める自分の要求を表現するために話し手によって使われる終助詞であると指摘した。

一方、自閉症研究の分野では、自閉症児は健常児に比べて終助詞をあまり用いないことが報告されている。この理由について、佐竹・小林（1989）は「自閉症児が質問や叙述的主張などの社会的に相互作用的な伝達機能、すなわち遂行的機能を獲得することが困難を持つためである」と推測した。佐竹・小林（1989）は、「よ」「の」「ね」等の終助詞を用いることがほとんどなく、電報文的表現を用いることが多い12歳6ヶ月、10歳7ヶ月、5歳7ヶ月の自閉症児に対し、場面構成と人物の表情と動作で内容を表現した絵カードを示し、それに対する適切な終助詞（「よ」「の」「ね」）を伴う文を産出させる訓練を行い、自閉症児にも（健常児よりは時間はかかるが）終助詞の獲得が可能であることを明らかにした。また、松岡・澤村・小林（1997）も、「終助詞付き報告言語行動」の集中訓練によって、自閉症児にも「よ」と「ね」の獲得が見られ、その後の家庭場面での追跡調査においても「よ」と「ね」と「でしょ」が観察されたことを報告した。こうした研究は「よ」や「ね」の使用と社会的相互作用との関係性を指摘するものである。

佐竹・小林（1989）に代表される考え方の他に、最近では綿巻（1997）等、バロン＝コーエン（1995）が提唱した「心の理論」に基づく解釈を適用した自閉症研究も目立つ。

バロン＝コーエン（1995）は、人間には、ID（Intentionality Detector：意図の検出器）、EDD（Eye-Direction Detector：視線の検出器）、SAM（Shared-Attention Mechanism：注意共有のしくみ）、ToMM（Theory of Mind Mechanism：心の理論のしくみ）の4つの仕組みからなる、他者の心を読むことに関する発達的な変化のシステムが存在するという理論を提唱した。また、こうした理論に基づき、自閉症児に他者の心を読むことに関係する4つのしくみのいずれかの欠損が認められるという仮説を提起した。

こうした考えを支持する研究者たちは、特に「ね」という言葉に、他者の心を読むことに関係する何らかの機能が存在するのだと考え、他者の心が読めなくなっている自閉症児に「ね」の使用が少ないのだという指摘を行った。そうした研究の1つである綿巻（1997）は、文法発達水準が比較的高い自閉症の6歳男児と、精神遅滞の5歳男児のそれぞれについて、家庭で養育者（主として母親）と観察者を交えた自由場面の発話を1時間テープ録音して発話された言葉を分析し、精神遅滞児の発話では発話された助詞の5割が終助詞で「ね」は使用頻度2位の助詞であったのに対し、自閉症児の発話では終助詞は助詞全体の12％にすぎず「ね」は全く

観察されないということを確かめた。また、発話された単語の分析から、精神遅滞児は会話的関係の維持を指向し、場面に密着した会話を行っているのに対し、自閉症児は実質的な情報内容を指向した会話を行っていることを確かめた。以上の結果から、綿巻（1997）は、「ね」が終助詞の中で「共感獲得表現助詞」に相当し、認知的あるいは情緒的意味情報を相手と共有するために使われていると結論づけた。

綿巻（1997）は「他者の心を読む」という行為に関して、実質的な情報内容の読み取りよりも他者の情緒的態度の読み取りを強調し、「ね」がこうした場面で「共感獲得表現」として機能することを特に指摘している。こうした指摘は、「ね」が情報内容の「書き込み確認」や「マッチする特定の文脈とリンクせよ」という指示として機能することを指摘した認知科学分野の研究が説明していない特徴を指摘するものであり、終助詞が対人場面における態度表明として機能することを指摘した過去の構文論研究者たちの研究の立場を支持するものである。

この節の最後に、研究分野は異なるが、言語社会学の分野において発達や自閉症研究と同様に「ね」の対人関係機能を指摘した宇佐美（1997）の研究を取り上げる。宇佐美（1997）は「ディスコース・ポライトネスという概念」に基づき、「ね」が「会話促進」「注意喚起」「発話緩和」「発話内容確認」「発話埋め合わせ」として機能することを指摘した[5]。このうち、終助詞「ね」が使用されている「会話促進」「発話緩和」「発話内容確認」の例文を、以下順に、11)、12)、13）に挙げる。

11）酔うね。
12）まだー、あのー、（話題主の）長女が23才なんですね。
13）じゃあ、2通、あればいいとゆうことですね。

各例文の文脈は示されておらず、確実な解釈をすることはできないが、一般に従来の文法研究は11）や13）の例文における「ね」の機能を聞き手の考えの「確認」として捉え、「聞き手に同意を求め、その意思を尋ねようとする（鈴木1976)」、「話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報が同一であることを示す（神尾1990)」等として規定し、12）の例文における「ね」の機能を「共応的態度の表現（神尾1990)」等として規定し、あるいは11)、12)、13）を一括して「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ（金水1993)」という操作指示等として規定してきた。こうした解釈はいずれも各例文が示す直接的な意味内容を分析したものであると考えられるが、宇佐美（1997）の規定はおそらく、話し手がそのような確認行為やマッチング指示を聞き手に伝えることによって二次的に聞き手に伝えられる心理的効果を記述したものであるように推測される。例えば誰かが「桜の花が満開だね。」と発言する時、その発話内容は、直接的には桜の花に関する事実の聞き手への問いかけであるが、聞き手にそうした事実を問いかける行為が、二次的に聞き手に向けた共感獲得のメッセージとして伝えられ、これにより話し手と聞き手の間の対人関係が調整され、二者間の「会話促進」が実行されるのではないかと推測される。宇佐美（1997）と同様に、発達と自閉症研究で取り上げられている発話文についても、話し手が発話文を通して聞き手に伝える二次的な心理的・社会的メッセージが検討されている可能性がある。こうした機能の解明については、今後更なる研究が必要であろう。

総合的考察

「よ」と「ね」に関する研究は学際的であり、様々な分野で、異なるアプローチによって、研究が進められている。

「よ」や「ね」の基本的性質を、過去の構文論的アプローチや最近の発達・自閉症研究の事例によるアプローチが指摘するような対人場面における話し手の態度表明として捉えるのか、日本語文法・日本語教育を中心とする語用論的アプローチが指摘するような「一致」「対立」に代表される内在的意味を有するものとして捉えるのか、それとも、談話管理理論に基づくアプローチが指摘するような「登録せよ」「リンクせよ」という「指示」や「操作指令」として

捉えるのか、研究者の立場によって考え方は様々である。この問題は聞き手側の受け取り方によって複数の解釈が成立する言語の多義的特性を反映しているのかもしれない。

研究方法については、大半の研究で研究者の経験や理論に基づいた用例解釈が採用されている。このため、対人場面の想定に際しても話し手側の視点から論じた研究がほとんどで、聞き手側の視点や聞き手の印象という観点を重視した研究はほとんど行われていない。これに対して、発達研究と自閉症研究の分野や一部の言語心理学分野では、発話時期の特定や発話頻度の分析、発話内容の質的分析、実験による参加者の一般的傾向の分析等が行われているが、これらの研究では分析対象とされる発話文の種類が限定的な用法に留まっている。

今後の「よ」と「ね」に関する研究には、まず、研究者自身の経験や理論のみに依拠したものでない、一般参加者の視点をとり入れた統計データに基づいた分析が求められる。こうした試みは岡本（1993）の他、坂本・玉岡・松本（2003）や福島（2004）等の最近の研究において見られるようになった。今後はより幅広い種類の用例に対する実証的研究が望まれる。

次に、分析に際し、言語の多義性を考慮して、「よ」と「ね」の直接的な機能とその使用が二次的に聞き手に与える心理的・社会的効果の違いを明らかにすることが求められる。そのためには、研究者が想定した用例だけを分析するのではなく、社会的文脈の中で実際に出現した用例の分析を並行して進めていくことが望まれる。

「よ」と「ね」に関する研究の更なる進展には、言語活動を人間関係の中で展開されるダイナミックなプロセスとして捉える視点が求められよう。

脚注

1 益岡（1991）は構文研究の一環として「よ」と「ね」の研究を行っている。

2 最近では、伊豆原（1993）のように、「よね」を「よ」とも「ね」とも独立した表現として捉えた研究も見られるようになった。

3 後に、Kamio（1995）は、BとCの間にBCとCBを設け、BC間の区分を細分化している。

4 例えば、野田（2002）は、これまでの日本語文法、日本語教育の研究の知見と神尾（1990）や金水（1993）の研究の知見を総合的に検討し、「よ」と「ね」をそれぞれ、「『よ』は、その文の内容が認識されるべきだと話し手が考えていることを表す。基本的に聞き手に対して用いられ、聞き手が文の内容を認識するべきだと、話し手が考えていることが表される」「『ね』は、文の内容を、何かと一致させながら聞き手に示すときに用いられる。聞き手の知識や意向との一致を問う用法や、話し手自身の記憶や結論との一致を示す用法などがある」と規定した。

5 宇佐美（1997）は、従来の終助詞研究と異なり、感動詞、間投助詞、終助詞、終助詞の間等用法、「よね」の一部としての「ね」のすべてを「運用面におけるコミュニケーション機能」という同じ枠組みの中で捉えて分類しており、「注意喚起」と「発話埋め合わせ」では終助詞の例文を挙げていない。また、この5分類に該当しない「ね」の用法があることも認めている。

引用文献

Baron-Cohen, S. 1995 *Mindblindness; An Essay on Autism and Theory of Mind*　The MIT Press
長野敬・長畑正道・今野義孝（訳）　2002　自閉症とマインド・ブラインドネス　青土社

福島和郎　2004「よ」「ね」の使用におけるパーソナリティ要因の検討　日本パーソナリティ心理学会第13回大会発表論文集　58-59.

古田喜照　2000　幼児による文末表現の習得と認知発達　―音調に注目して―　日本認知科学会大会発表論文集, 17,　230-231.

橋本進吉　1934　国語法要説　国語科学講座6　明治書院

蓮沼昭子　1988　続・日本語ワンポイントレッスン2　月刊言語 17,　94-95.

井上優　1993　発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」　―命令文・依頼文を例に―　国立国語研究所報告105　研究報告集, 14, 333-360.

犬飼隆　2001　低く短く付く終助詞「ね」　音

声文法研究会（編）文法と音声　くろしお出版　Pp.17-29.

Kajikawa,S., Amano,S., & Kondo,T. 2004 Speech overlap in Japanese mother-child conversations. *Journal of Child Language*, **31**, 215-230.

神尾昭雄　1990　情報のなわ張り理論　—言葉の機能的分析—　大修館書房

Kamio, Akio 1995 Territory of information in English and Japanese and psychological utterances. *Journal of Pragmatics*, **24**, 235-264.

金水敏　1993　終助詞ヨ・ネ　言語 **22**,　118-121.

益岡隆志　1991　モダリティの文法　くろしお出版

松岡勝彦・澤村まみ・小林重雄　自閉症児における終助詞付き報告言語行動の獲得と家庭場面における追跡調査　1998　行動療法研究, **23**,　95-105.

Maynard, Senko, K. 1993 *Discourse modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*. Amsterdam: Benjamins.

永野賢　1959　幼児の言語発達について　—主として助詞の学習過程を中心に—　ことばの研究, **1**,　383-396.

野田春美　2002　終助詞の機能　宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃　モダリティ　新日本語文法選書, 4　Pp.261-288.

岡本真一郎　1993　情報の関与と文末表現　—間接形と終助詞「ね」の使用への影響—　心理学研究, **64**,　255-262.

岡本真一郎　1996　ことばの社会的スキル　相川充・津村俊充（編）　社会的スキルと対人関係　誠信書房　Pp.50-71.

大曽美恵子　1986　誤用分析 1「今日はいい天気ですね。」－「はい、そうです。」日本語学, **6**,　91-94.

坂本勉・玉岡賀津雄・松本充右　2003　空主語文の処理における終助詞「よ・ね」の機能に関して　日本言語学会第 127 回大会発表論文集　22-23.

佐久間鼎　1952　現代日本語法の研究　厚生閣

佐竹真次・小林重雄　1987　自閉症児における語用論的伝達機能の研究　—終助詞文表現の訓練について—　特殊教育学研究, **25**,　19-30.

佐治圭三　1957　終助詞の機能　国語国文, **26**, 461-469.

杉藤美代子　2001　終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション　音声文法研究会（編）文法と音声　くろしお出版　Pp.3-16.

鈴木英夫　1976　現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について　国語と国文学, **53**,　58-70.

田窪行則　1992　談話管理の標識について　文化言語学編集委員会（編）文化言語学　—その提言と建設—　三省堂　Pp.1097-1110.

陳常好　1987　終助詞　—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—　日本語学, **6**,　93-109.

時枝誠記　1951　対人関係を構成する助詞・助動詞　国語国文, **20**,　531-540.

宇佐美まゆみ　1997「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス　現代日本語研究会（編）女性のことば・職場編　ひつじ書房　Pp.241-268.

綿巻徹　1997　自閉症児における共感獲得表現助詞「ね」の使用の欠如：事例研究　発達障害研究, **19**,　146-157.

渡辺実　1968　終助詞の文法的位置　—叙述と陳述再説—　国語学, **72**,　127-135.

山田孝雄　1908　日本文法論　宝文館

横山正幸　1992　幼児による終助詞ネの獲得　—R 児の場合—　福岡教育大学紀要, **41**, 351-357.

Review of studies on Final Particle "yo" and "ne"

Kazuro Fukushima Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tsuneo Iwasaki Mejiro University, Faculity of Human and Social Sciences
Shouzo Shibuya Mejiro University, Faculity of Human and Social Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2006 vol.2

Abstract

Studies on final particles "yo" and "ne" could be roughly classifiable into three groups. First, the early syntactic approach in the field of the grammar of Japanese national language and the recent case studies of verbal development and autism pointed out that the final particles had interpersonal relations. Secondly, the pragmatic approach in the field of Japanese grammar, Japanese language education and some linguistic psychology stressed their subsistent meaning. Thirdly, the approach from the theory of discourse management emphasized the function of informational message processes. Thus, the interpretation of "yo" and "ne" was different in one another depending on the viewpoint of studies. Further, in the most studies a definite number of sample sentences were extracted and examined, and the final interpretation was introduced by the researcher's own framework. In order to make further progress of the study on these final particles, it is required to verify the interpretations mentioned above on the basis of statistical analysis of data from usage of the particles in every-day life.

Key words : final particle "yo" and "ne", syntax, pragmatics, informational message processes, interpersonal relations,